

## パネルディスカッション

開催日…令和三年十二月九日

司会…名古屋城調査研究センター 学芸員 木村 慎平（木村）

パネリスト…熊本大学永青文庫研究センター長

稲葉継陽氏（稲葉）

同センター 特別研究員 後藤典子氏（後藤）

東京大学史料編纂所 准教授 及川 亘氏（及川）

名古屋城調査研究センター

所長 服部 英雄（服部）

同センター 学芸員 堀内 亮介（堀内）

**木村** ここからは研究報告とコメントを受けまして、ディスカッションに入りたいと思います。稲葉先生から多岐にわたる論点を提示していただきましたので、少し整理してお尋ねしたいと思います。

まず、最初のポイントとして、熊本大学が所蔵する「名古屋御城御普請衆御役高ノ覚」（以下「役高ノ覚」、口絵1）という史料の年代比定について、議論したいと思います。この史料は細川家の普請奉行である岡村半右衛門尉ら三名から、松井佐渡守はじめ三名の家老に宛てて出された文書で、名古屋城普請に動員された大名の石高や割り当て坪数の基準が記され、細川家の負担分について書き上げられています。問題はその年代で、文書には「卯月十八日」としか記されていません。服部所長の基調講演ではこの文書を慶長十四年に比定されたわけですが、及川先生

の報告では慶長十五年に比定されました。この点について、及川先生のご意見をいただけますでしょうか。

**及川** 私はやはり、慶長十五年だと思っています。服部さんの講演にも出てきた山内家文書のなかに、慶長十四年の篠山城普請に山内家が出役したとき、普請場から国許に向けて出された五月十六日付の書状が一通あります。そのなかに翌年、篠山城普請が慶長十四年ですから十五年に、今度は丹波亀山で普請があるらしいということが現地で風聞となっていることが記されています（第二章「補論」参照）。これは丹波・丹後現地の大名旗本衆のあいだでの風聞ということもあり、かなり確度が高いものだったと思います。

それを受けて山内家ではどうしたかといいますと、亀山に自分の下奉行を送って石を確保させるということを行っています。実際に亀山城に行ってみますと、その石切場が残されています。山内家ではないですが、浅野紀伊（浅野幸長）、羽柴三左衛門（池田輝政）の刻印の入った石が見つかっています。実際には亀山城（普請）には浅野と池田は行っていないわけですから、その前の年に山内家と同じように下奉行を送って石を確保するということをやっています。

ですから慶長十四年の五月の時点では、山内家にしても浅野家・池田家にしても名古屋城のことは考えていないと思います。名古屋城を築くという家康の内意は出ていたかもしれませんが、実際に出役することになるかどうかについては、否定的であったと考えられます。この「役高ノ覚」には、これらの大名も入ってきているわけですから、やはり慶長十五年だと考えます。

**木村** ありがとうございます。この文書は熊本大学が所蔵する松井家文書に含まれるわけですが、この点について、後藤先生のお考えをうかがえますでしょうか。

**後藤** 服部先生からご指摘がありましたように、細川忠利は慶長十四年四月に結婚しますが、そのころを含め慶長期の史料はほとんど永青文庫にはありません。松井家の史料を通覧しても、慶長十四年に普請（の準備）をしていたというような史料は今のところ見当たりません。忠利が結婚して、家老たちがお祝いを差し上げるといような史料ばかりで、普請に関する史料というのはなかなか見出せません。やはり「役高ノ覚」は慶長十五年の文書ではないかと思えます。

「大御所様の好みよつて方針がころころ変わる」といようなことを言っている史料もありますので、（丁場割りや役高の設定は）ころころ変わっていたのではないかと思えます。

**服部** 講演では時間の都合で少し説明を省いてしまいましたので補足します。

まず四月十八日付の「役高ノ覚」ですが、ここに記されていることで、細川家が新たに得た情報というのは天守・本丸と二之丸の坪数だけです。石高については既知のもので、誰でも知っていることです。慶長十四年正月に家康が尾張に来て築城すると言つて普請奉行を二月に決めているわけですから、それから二か月たった四月には、骨格的な部分はどう決まっていたのではないかと自分は考えています。初期に（名古屋城普請の）絵図がいくつか作られています。堀については全て形は同じです。（慶

長十四年四月段階では）名古屋城というのがどれぐらいの規模なのかは誰も知らないわけで、那古野村を移転している最中に過ぎない。細川は規模と助役の面々を知りたかった。坪数さえ分かれば後は全部計算で自分の持ち分を割り出すことができます。ここ（「役高ノ覚」）にたくさん項目が書いてありますが、「御家中」とか「石高」と書いてあるところは計算上ですべてわかる情報です。それをもとに計算していくと、小数点以下というか、非常に細かい数字が出てきますが、これは机上でできるもので、坪数が分かれば国許にだいたいどれぐらいの規模なのかということも伝えられます。

慶長十四年三月の終わりに千代姫と細川忠利の婚礼があります。千代姫は小笠原家の娘で（家康の息子で自害した）信康の孫、悲劇の死を遂げた信康の孫ですから家康にとつてはひ孫であつて、秀忠にも特別な思いがあつて養女にしています。その千代姫と忠利の婚礼があつて、松井が御輿役で駿府と江戸に行つており、非常にめでたい時でしたので、いったい名古屋城普請はどれぐらいの規模なのかということを、細川家が幕府に教えてくれといったときに、今の段階ではこういう数字だと教えてもらうことは可能だったと思います。設計図を作っている段階で、堀の幅はどれぐらいで、長さはどれぐらいになって、高さはどれぐらいになるという概数は分かったので、その報告がこの「役高ノ覚」です。

もう一点は、靖國神社遊就館所蔵の「名古屋御城石垣絵図」（以下、「絵図」）がいつのものかという問題です。私は生駒が花押を据えていないことから、生駒が藩主の死亡と葬儀で不在になっていた時期ということ、慶長十五年の四月上旬かと思つています。名古屋城の生駒家丁場には刻印があるので、工事をやっていることは間違いありません。

そもそもなぜ四月十八日の「役高ノ覚」が慶長十四年と考えたかと言いますと、(これを慶長十五年とすると) 工事日程がきつすぎる。丁場割りの方が覚より先になる。不自然だと考えたからです。及川先生は根石置き直前に、この丁場割図ができたというご説明だったと思いますが、この絵図の通りには工事できません。まず御深井丸と天守の間が地続きになっているので、これを設計変更しなければいけません。それから鉄初めで掘りは始めるわけです。

今日私が言及した浅野の史料ですが、「四月十八日、御縄張り鉄初めにつき暇を得ず」と書いてあります。なぜこの段階になって縄張りで暇がない、忙しかったかというところ、ここで設計変更の議論をしていたからではないでしょうか。それが決まってから、鉄初めが行われた。現在の天守は全部掘り切って石垣がある。この絵図のような地続き施工ではありません。上に石垣があるままで、その下の土を掘るわけにはいかない。今の天守はこの絵図が設計変更されたあとに造られています。それには時間が要ります。篠山城の例ですと、六月一日鉄初めの後に六月二十日に根切りをやっています。根切りの次が根石置きですが、篠山城の場合は七月九日、そこまでひと月と九日。日にちを置かなければなりません。ですのでここ(「絵図」の作成)が根石置き(六月三日)ではありません。もっと前に(「絵図」が)できていて、それを設計変更しなければならぬので、それだけの日数を見込まなければならぬと思います。

**及川** 後藤さんのご報告と服部所長のご発表にもあったと思います。が、当初五月一日に根石置きじゃないかという情報がありましたよね。それ(根石置き)は、結局五月一日ではなくて、六月三日になります。

それは「役高ノ覚」から賦課基準を変えていくところに日程変更の原因があるのではないかと考えています。「役高ノ覚」を十五年の四月とすると、それを整合的に理解できるだろうと考えています。「役高ノ覚」が慶長十五年四月十八日だとして、それまでのプランであれば五月一日に根石を置くはずであったのですが、それが最終的に六月三日になるというのは、そこから何らかのプラン変更というか、これは賦課基準の変更というのがそこにあるのだろうと考えています。

それから繰り返しになりますが、前年の篠山城普請が本格的に始まる前に、すでに次の年は亀山城というように現地では考えられていたということからすると、そこで山内その他、篠山城の普請に携わっている大名たちが「役高ノ覚」に出てくるというのは納得しがたいと思います。

**木村** この点については、まだまだ議論が分かれておりますが、時間の関係もありますので、次の論点に移りたいと思います。

稲葉先生のコメントで、石切場の話が出たかと思えます。名古屋城の石垣を普請するにあたっては、その付近に良い石が取れる場所があって、そこから切り出してくるわけです。では、各大名はそういう情報をどうやって知るのでしょうか。また、石切場というのはどのように扱われるのでしょうか。この辺り、具体的に細川家の場合ではいかがでしょうか。

**後藤** (名古屋城普請の)奉行三人は、いずれも江戸城石垣普請などで、ずっと普請してきた人たちです。ですからどこに良い石があるかなどについて精通した人たちではないかと思えます。慶長期の奉行について

は、この人が何奉行だった、ということまでは特定できていませんが、慶長期の普請の時に必ずでてきた奉行三人かと思っていますので、この人たちは石専門の奉行だったのかなと思っています。

**木村** ありがとうございます。及川先生はいかがでしょうか。

**及川** まず、石のある場所の庄屋と交渉します。これは元和・寛永期の大坂城の普請などではある程度史料で追えるのですが、石の出る場所の庄屋と交渉します。それで、とにかく場所を押さえてしまつて、その上で幕府の役人にこういうことでよいかというような了解を取り付けるということだと思います。ですので、とにかく早い者勝ちです。ですから（名古屋城普請の）前年の篠山城普請のまだ工事が始まる前に亀山に下奉行を送るというのもそういうことで、とにかく早く石を押さえておきたいということだと思います。名古屋城だと今後、何かもう少し具体的な史料が出てくるかどうか、楽しみにしているところです。

**木村** ありがとうございます。今の話ですと、石切場を取り合うという話で、どちらかというと大名同士で競う側面がみられるかと思えます。一方で、今日の報告をお聞きすると大名同士で協力関係、あるいは指南する関係があるというお話がありました。例えば及川先生の報告では池田輝政がかなり重要なキーパーソンになっているというお話がありました。この点、池田輝政という人物の立場について、もう少しご説明いただけますでしょうか。

**及川** 池田輝政は家康の婿ということになります。非常に家康の信頼が厚いということもあつて、実説かどうかはわかりませんが、名古屋城普請の時に、福島正則が「あまりに大変だ」と、こんなに大変なのは我慢ならないので池田輝政に、あなたは家康と仲が良いのだから何とか言ってくれ、というようなことを持ち掛けて、輝政の方は苦笑いして聞いているというような状況だと思うんですけど、『徳川実紀』などにもそのようなエピソードが出ています。それ自体は俗説だと思いますけれども、そのように考えられるような（池田輝政の）位置づけというのは伝えられていただろうと思います。

（池田輝政は）姫路にいて西国の押さえとして、幕府のなかでも重視されてきました。篠山城普請では全体の総責任者を任されたりしているということ、非常に重要な役割でした。名古屋城の普請でも先ほど後藤さんのご報告にも出てきたと思いますが、その他の大名にも指南する位置づけに置かれていたと思います。

**後藤** 追加していいですか。池田輝政ですけれども、松井家の史料に、この名古屋城普請で池田輝政からは細川家に石の提供もあつたということが確認されています。

**木村** ありがとうございます。名古屋城というと、何かと天守台普請を単独で担った加藤清正は注目されますが、他の大名はどうなのかというと、あまり具体的なイメージは無いというのが実情かと思えます。今日のお話を聞いて、だいぶそれぞれの大名の関係などがみえてきたのかなと思います。その点で、例えば細川家から見た大名同士の関係という

のはどういうものだったのでしょうか。

**後藤** 及川先生からお話しがありましたように、丁場の分担について望みを聞いてもらえる余地がありました。その時に、親戚関係の木下と稲葉の家中とは隣り合わせになるようにとっているわけです。それは、その前の江戸町普請、江戸城石垣普請の時もやはり稲葉と木下とは同じ家中のつもりでという掟書が出ています。他の大名家については私の報告で触れた通りです。

**稲葉** 後藤さんのお話のなかで、加藤家（清正）と黒田家は特別だから気をつける、というような史料がありましたよね。

**後藤** そうですね。やはり黒田とは仲が悪いですね。

**稲葉** 清正が特別だ、というのはどういう意味なのでしょう。

**後藤** 清正は「格別」なので、という言い方をしていますが、加藤と（細川が）特に仲が悪いとは聞きません。きちんと音信のやり取りもあります。黒田と加藤といえば石垣を築く名手、築城の名手だというのは、忠興は認めていますので、そういった意味合いもあるのかなと思いますが、どうでしょうか。

**木村** 大変興味深いお話し、ありがとうございます。また別の論点として、普請の費用をどのように負担したのかというコメントがあります

た。堀内さんの報告のなかでは具体的な扶持米の給付について、どれくらいの額が支給されたかということが分かり、名古屋城の場合はその扶持米が大名の表高に比例して支給されているようだという事ですね。では、扶持米の額は何を基準に算定しているのでしょうか。

**堀内** 私が今回みてきた史料のなかには、それについての具体的な情報はないので、推測にはなっていますが、基本的にこういった夫役、要するに人足を一日雇うには一人につき一日五合ほどが当時の目安になるのではないかとされています。そこで扶持米の額を五合で割るとどれくらいになるのかという計算をしてみました。加藤清正の場合ではおおよそ七百六十一石扶持米をもらっていますので、延べ人数で十五万人くらいを名古屋城普請に動員したというような計算になります。それで一日あたり何人を動員しているのかを考えますと、当時の大名に賦課される夫役の基準として、「千石夫」といって千石あたり一人の割合で夫役人を出すという方法がありまして、それに基づいて計算すると加藤清正の場合は表高五十一万九千石、つまり一日あたり五百十九人になります。そこで十五万人を五百十九で割ると、だいたい三百日くらいになります。つまり、一日一人につき五合を与えて清正が動員する必要がある人数を概算で計算してみると、普請にかかる期間はだいたい三百日、延べ人数としては十五万人、それで一日五合の扶持米を与えるという計算をすると七百六十一石になるわけです。

このように扶持米を計算したのではないかという推定はできますが、史料的な制約もあり、机上の空論にならざるを得ない部分もありますので、一つの仮説としてみていただきたいと思います。

**木村** ありがとうございます。今のように一定の給付がある一方で、諸大名にとって普請の負担は非常に重いという評価もあります。一般的なイメージとしては、「天下普請」「公儀普請」というのは諸大名の財力を弱らせて力を削ぐためにやったのだというような話ですが、広く浸透しているかと思えます。このようなイメージというのは、どう評価すべきでしょうか。

**及川** 私は、これは結果として大名が困窮するということだと思えます。石垣の普請は特にそうですが、これは軍役だということですね。戦争は無いけれども、軍役として掛ける、つまり戦争の替わりですよ。慶長期というのは、まだもちろん豊臣家はあるという状況です。先ほど二重公儀か否かというようなお話でしたが、まだ慶長年間というのは、例えば芸能民などに対する給分などは秀頼が与えるという状況にあり、それが切り替わっていくのが慶長十五年ころ、慶長年間後半になるわけです。その時期に、例えば猿楽や囲碁・将棋など、秀頼が給付していたものを家康がやるようになります。つまり公儀を家康へどんどん接収していく時期だと思えます。それがなぜできるのかというのは、軍事力によるのだと思えます。

家康の軍事力というのは、要は家康が軍隊を動員すると言えば、皆大名も従うのだという、そういうことによるのだと思えます。だから家康としては有無を言わずに軍事動員できるということを見せつける、軍事動員すれば実際に大名が従うんだということを確認していくと、そういうことが公儀普請の城郭建設を通じて行われていたのだらうと思えます。そちらが本質で、結果として大名が困窮するということではないか

と考えています。

**木村** ありがとうございます。このあたり、例えば細川家の具体的な状況はいかがでしょうか。

**後藤** 公儀普請では借銀、借銀ですね。慶長期の江戸町普請の時でしたか、忠興が忠利に、その方の才覚で何とかしろ、というような史料もあります。慶長十九年の江戸城石垣普請の時には忠利は刀・脇差を京都で売っています。それでも足りなくて、その時は藤堂高虎が肝いりをして借銀をするということがありました。殿さまの史料だけみても、忠興は日用を雇ってでも絶対（普請に）遅れるな、と言っています。大名にとって普請が遅れるというのは本当に外聞が悪いことなので、とにかく日用を雇ってでも絶対に遅れるなと。そればかり殿さまの文書ではできませんが、実際にお金がかえなくて困っているのは現場の奉行です。

元和六年か寛永十三年の江戸城普請のときだったかと思いますが、現場の奉行が、買った物の代銀が払えないため、売った商人たちが殿様に目安を上げると言っている、という史料があります。それで石工たちが石の雨覆いの苦をした方がいいからと言っているが、その苦を買うお金もないと、現場から言ってくるんですね。それを現場の奉行が、家老になんとかお金を出してくれと言っています。家老は長岡佐渡（松井興長）ですが、その方たちの才覚でとにかく借銀をしろと言っわけですね。「その方たちの才覚で」というのはよくでてくるのですが、そのような感じで現場がすごく困るのです。他の元和・寛永期の史料でも、幕府の代官に十貫目払わなければならないが、無いからなんとか送ってくれと言っ

ています。苦を買わなければいけないというときの史料では、石切たちがこのままだと引いてしまうかもしれない、石切ももうできなくなってしまう、そうなったらどうするんだと奉行が言ってくるわけです。公儀に目安を上げられると外聞が悪いでしょ、と言ってくるんですね。そういったかなり生々しい史料が、家老家の史料にでてきます。

**木村** ありがとうございます。大変よく状況が分かりました。このあたりをどう評価するのも、公儀普請というものをどのように理解するのかという点に大きくかわる論点かと思えます。最後に、研究報告をしていたいただいたお三方に、それぞれ他の方の報告に対して、何かコメントや質問があればお願いします。

**及川** 堀内さんの報告を聞いて、費用をどうやって捻出するのかという問題は非常に重大だと思いました。一日五合とか、一応試算を出していただいたのですが、実際に例えば水主を雇うときに飯米として一日三合だと少なくて五合というのが一般的とされます。もしそれに賃金を加えるともっとたくさん払わないといけないことになりましたが、一般的に飯代だけで五合出すということですので、それは必ず（戦や普請の）主宰者が払わなければいけないわけです。秀吉が朝鮮出兵をするといふときも、飯米については秀吉が自分で払うということ、大名任せというか、何でもかんでも大名が工面しないといけないことではないか、その軍隊を誰が動かすのかというのがすごく重要なのではないかということ、聞いていて感じました。公儀普請も同じだと思えました。

**堀内** やはり名古屋城の公儀普請というのは、大坂の陣後に行われる江戸城の普請や大坂城の普請とは性格が異なる面があり、名古屋城の普請の場合は及川先生も後藤先生もおっしゃったと思いますが、大名個人の関係性というのがかなり重視されているのかなと思いましたが、私の報告で最後の方に少し触れましたが、名古屋城より前に行われた江戸城や丹波篠山城は、將軍の秀忠が介入していて、秀忠の命令によって大名たちが動員されるのですが、名古屋城の場合はどちらかというと家康の意向が強く働いて築城された――家康の天下人としての力だと思えますが――個人の力で大名たちを動員して、細川と稲葉と木下が協力して普請をしたり、中国・四国の大名でいえば池田輝政の配下に入って普請したりという状況があって、そういった大名個人の関係というのが、名古屋城の普請においてはかなり重視されたのではないか。そうした個人的な関係によって大規模な普請が行われたのではないかというのが、お三方のご報告を聞いて思ったところです。

**後藤** 「役高ノ覚」の計算の仕方というのは、これをみても全然わからなくてですね、いろいろ今日教えていただいたので検討してみたいと思います。

**木村** 最後に、稲葉先生何かありましたらお願いします。

**稲葉** はい。今日、最初にまとめて申し上げたように、史料研究の確実な進展というのが、非常に進んできているというのが今の討論を聞いていてもよく分かりました。今日、一点の重要な史料について、それが

慶長十五年なのか十四年なのか、この場では結論は出ませんでしたけれども、こういう議論を進めていくことによってその周りの様々な別の史料の研究も進みますし、さまざまな仮説のもとでまた考察を進めていくことによって、より多くの事実が明らかになるわけですから、このような論争的な史料研究というのが実態を深める、本当に唯一の道なのだということが、うかがって大変よく分かりました。

それから、これをご覧になった市民の皆さんは、これから名古屋城に來られた時には、ぜひ普請の現場というのを今日の皆さんのお話のなかから、その情景を思い浮かべるような、石垣をそれぞれの大名たちが相談しながら築いていって、でも最後に天端が合わなくてそれを揃えているような、そういう状況というのを、石垣をご覧になりながら、想像しながら史跡を見ていただいたり、そういうことにつながっていけば、ますます名古屋城が身近に感じられるようになるのではないかと。そういう材料がたくさん出たと思います。

**木村** ありがとうございます。今日の議論で、非常に多岐にわたる問題が提起されたかと思えます。一つは、まだ基礎的な部分においても事実関係の一つ一つについて、検討する余地があると思えました。服部所長からは大きな問題提起がありましたけど、それに対しての反論も当然あるということで、まだ一つ一つの事実関係を史料に基づいて論証していく必要があると思えました。

もう一つは、名古屋城における公儀普請の歴史的な位置づけをどのように考えるのかという点についても、費用の負担をどう考えるのかという問題もありますし、特に大坂の陣以降の公儀普請のあり方と何がどう

違うのかという点で、非常に過渡的な在り方がみえるのかなと思えました。堀内さんからは大名の個人的関係が反映されているという印象を受けたというコメントもありましたが、そういう部分をどう評価して位置づけていくのかという点については、大きな研究史的な意義があるのではないかと感じました。

名古屋城調査研究センターもまだ発足して間もない機関ですので、こういった研究を様々な機関の研究者の方とも協同しながら深めていき、こういった議論の機会を設けて、その成果を発表していきたいと考えております。今後ともよろしくお願いいたします。

《終》